

Vol.

118

2007・6

ヤンマーだより



◆ The energy of Japan 第7回「折り紙」
◆ The Challenge 株式会社 吉田耕司社長
◆ 業界展望2007
◆ ホクレシア号日本到着

折り紙

紙を折る
思いを織り込む
そこに言葉を超える
心の交流が生まれる

たった一枚の紙片を折り廻らすだけで
できあがる立体造形。

2次元から3次元への移行を、

まるでマジックのように感じさせる折り紙は

初めて見る人を魅了し、始めた人を夢中にさせる。

そんな人々を世界各国に教習やりーとシラカを聞き、

子どもからお年寄りまで、

愛好者の数をどんどん増やしているという。

その一方で、アートの新分野として、

幾何学の研究テーマとして、

指先を使うリハビリの道具として、

流行のファッションとして、

次々発見される新しい価値が目を驚かす。

われわれが知らずから最も親しみ、

海外に紹介したい日本文化の土壌に、

必ず顔を見せる折り紙。

紙を折る。

そのシンプルな作業が、今、

国境を越えて心のふれあいを作り出す。



折り紙は誰にでもできる”遊び”。
教えるほうも教えられるほうも楽しい。
紙1枚から始まる



PROFILE

あおやましほこ 折り紙作家。日本折紙協会会員、ブリヂ・ハンス、折紙協会会員、オリガミUSA会員、日本折紙協会折紙講師。初職の学生だった祖母の影響を受け、幼少から紙遊びに興味をもち、自然に磨かれた造形から色やデザインへの感性を育む。1998年から2005年までオーストラリア・シドニーに在住し、各種コミュニティセンター（市役所）をはじめ、小学校、幼稚園、子供図書館、アート専門学校、お年寄りのグループ、耳の不自由なグループ、そしてニューサウスウェールズ大学、ニューサウスウェールズ州立美術館の教育部門で、日本の文化を折り紙を通して紹介する。オリジナルのお話付き折り紙、パフォーマンスで、子どもからお年寄りまで、折り紙を身近なものとして定着させた。帰国後も名古屋市千種区で折り紙の創作活動や指導に熱心している。



小さな折り紙を集めるとちょっとしたジオラマができる。作る楽しさも魅力の一つだ

折り紙創作家 折り紙講師

青柳祥子さん

8年間のオーストラリア在住期間中、子どもからお年寄りまで数多くの人々に折り紙の魅力を伝えてきた青柳さん。そのワークショップは常に人気の的となり、目を輝かせた受講者で教室は埋まった。4分の1が移民といわれる国に、言葉も習慣も違って思いを伝えることができた背景には、「折り紙はコミュニケーションの媒体の一つ」とする彼女の強いポリシーがあった。

折り紙は日本だけでなく昔から世界中で親しまれてきた

▼オーストラリアで折り紙を教えておられたが、向こうで折り紙は知られていましたか？

「一部の親日家の間では日本文化の一つとして知られていました。図書館にはちゃんと日本の折り紙の本も置かれていたんですよ。」

折り紙はよく日本独自のものと思われていますが、実は世界各国で昔から伝えられているんです。例えばアンデルセンの童話「すずの兵隊さん」のなかには、いじめっ子が人形の兵隊を、新聞紙で折った船に乗せると川に流すシーンがあり、新聞紙ボートのルーツはヨーロッパと言われています。ナブキン折りも類似した文化ですし、中国にもお菓子の箱を紙で折る習慣が見られます

しね。

これらに共通するのは、紙が皮や木などの代用品として使われた点。多くは実用的な道具の材料として紙が選ばれていた。比べて日本は、紙を折って楽しむこと自体を目的とする独特の伝統文化を形作ってきました。

▼使うために折る文化と、楽しむために折る文化といったところですね。

日本での紙の誕生は、僧侶が中国から紙の製法を伝えた6世紀頃と言われています。日本人は、その原料を研究し、自国の植物を使用してつくりあげたのが、日本独特の和紙です。この貴重な和紙を神社では御幣（ごへい）として飾り、貴族たちは贈り物を包んで飾る習慣に用いました。折るという行為は自分を清めることだとも言われており、茶道や華道と結びついて礼法としての折り紙が発展してきました。その一方で、紙に親しむ土壌も育ま

れてきたんですね。

今、私たちのよく知る鶴や、やっこさんなど、遊技折り紙は、室町時代に始まったと言われています。その頃になると紙の生産、需要が増大したこともあり、庶民にも普及し、和紙は貴族だけのものではなくなりました。江戸中期になると、折り紙遊びは風刺画にも登場。世界最古の遊技折り紙の資料である「秘傳千羽鶴折形」が出版されたのもこの頃です。作者は、魯編庵義道（ろへんあんぎどう）という伊勢桑名のお坊さんでした。

和紙が他国の紙より丈夫だったこと、折りや、破れに強く、型崩れも少ない点が、手先が器用とか机上の遊びが得意という点と併せて、発展を促した要因かもしれませんね。



折り紙展（大阪）に展示された「秘傳千羽鶴折形」壁に貼られているのが複製書



バスケット



ウシ



花とミツバチ

▼世界中に折り紙を受け入れる下地はあったわけですね。

そうですね。私がシドニーの市役所で初めて折り紙を折ったとき、周りに黒山の人だかりができ、1枚の紙が、ただ折るだけで、いろんなものになるのを見て「ペーパー・マジック」と歓声が上がりました。そして誰彼となく折り方を教えてくれと……。奇異な異文化ではなく、自分にもできる遊びの文化として受け入れてもらえたんですね。

4人に1人が移民のオーストラリアでは、語学をはじめ市役所が移民のために無料でさまざまな教室を用意しています。私が折り紙を教えるようになったのも、私自身がここで英語を教えてもらった恩返しとして。ある日コーディネーターから「クラフト教室のネタがなくなつた。シヨウコは日本人だからオリガミを教えられないか」と頼まれたのが、きっかけでした。

確かに折り紙は知っているけれど、もう何年も折ったこともない。第一、教えるほど知らないし、と最初は尻込みしたのですが、反面、すごく魅力的な課題に思えて引き受けました。それから日本折紙協会のテキストで猛勉強して、折紙講師の免許を取得。このときに、折り紙の奥の深さ、楽しさを改めて知ったのです。

創作から、遊びから、科学から、
折り紙へのアプローチは多彩
▼奥の深さ、楽しさとは？

折り紙の種類はもう数え切れないくらいです。誰かが知っている簡単なものから、海外でも芸術品のように高い評価を受けた前川淳さんの「悪魔」(※1)のように、いったいどうやって折ったのか、ちょっと見ただけでは分からない作品まで……。でも、あらゆる折り紙は、大橋晴也先生原案の「折り紙の木」と呼ばれる12の基本的な折り方、三角形に折る、山折りにするなどの組み合わせなんです。

伝承折り紙には、そのすべてが織り込まれています。私もそうでしたが、伝承折り紙を何度も何度も折っているうちに、どう折っていいか、思うとおりの立体ができるかが見えます。折る人次第で、深くも浅くも広くも狭くも世界が広がる……。それが折り紙なんです。

▼最近では、数学の教材になったり、リハビリに活用されたりとか、さまざまな面から注目を集めていますね。

私が教えていた方の中にも、精神的に辛いことがあり、そのケアとして紙を折っていた方もいました。折り紙で折る動作の反復です。その単純さがメダイテーション(瞑想)のような効果を出し、シンメトリの造形が心を落ち着かせるのだそうです。

また、人工衛星のソーラーパネルの運搬には、東大名誉教授の三浦公亮(こうりょう)先生が折り紙から発想された「ミウラ折り」(※2)という技術が生かされています。これはじやばらのように幾重にも折り畳んだパネルの表紙と裏表紙を引くことで、大きな1枚のパネルに広がるというもので、電車の路線図などでお馴染みの方もいるかもしれません。

「折り紙の木」を前に、すべての折り紙は、ここに記された12の折り方から成り立っているという



子供からお年寄りまで「折り上げる」
楽しみは共通。シンプルだからこそ
刻み込まれる世代に届く



横に歩く

いろいろな分野で活用されるようになってきましたね

▼青柳さんのワークショップでは、紙を折るだけではない「プラスアルファ」がありますよ。

折ってしまえばおしまい、というののも折り紙です。後は玄関や部屋の飾りにしたり、プレゼントに添えたりするくらい。シドニーで教えているときも、何とかもつとミニニケーションの手段として広げることができなかった。いつも考えていました。

そこで子どもたちには、折り終わった後、好きな色や柄に着色させたり、みんなの作品を集めてパノラマのように貼り付けたり。すると子どもたちは素晴らしい想像力を発揮して物語を作ってしまうんです。

70代80代のお年寄りに教えたときは、事前に通達して写真を一枚持つてきてもらうようにしました。折っていただいたのは写真一枚の思い出について語っていただいたのです。たいがい家族のことでしたが、あるおじいちゃんは「これはマイアミだ。君たちは行ったことないだろうから見せ

てやろうと思つてな」ときれいなビーチの写真掲げる。誰かが「あんたはいつ行ったんだ」とツツコミを入れると、「実はわしも行ったことはない」。会場は大爆笑です。そんな素敵な時間がつくられたのも、みんなが紙を折るというプロセスを経たから。これも折り紙の持つ力ですよ。

▼そんな中で、折り紙の魅力を伝えることも身近なところにある。

あなたは折り紙をどうやって覚えましたか？ たぶん多くの人は、ご家族や先生から直（じか）に教わったはず。そのとき、いろいろな会話が交わされる。お父さんやお母さんが小さかった頃のこと、人生のこと、学校であったこと、物語やおとぎ話。それが折り紙の持つ、一番大きな魅力じゃないかと、私は思っています。

人と人との絆を深めてくれる媒体と言つていいかもしれません。折り紙を関に挟むことで、言葉が通じなくても相手のことは分かるし、いつしか心を通わせることもできます。子どもたちの、いいえ大人でも、私が紙を折る手元を見つめる

輝いた目に接するだけでも、それは十分ミニニケーションになっていると思います。

折り紙は一枚の不切正多角形の紙を折っていくだけ、というのが原則です。でも動物を一枚で折るより、頭を一枚、体を一枚で折るお互いを差し込むようにすれば、複雑な工程を10も20も割愛することもできます。このような折り紙を複合折り紙と呼びます。一枚にこだわらず、何枚かで組み合わせる楽しさ。折り紙もそれなりのよさがあります。作品を自分ひとりで完成させたという満足感、達成感が、自慢へとつながるのです。原則に忠実に、難しい折り方で苦労して、口数が少なくなるより、少しぐらい原則を破つても会話するゆとりがあるほうが楽しいと思いませんか？

グロトバルという言葉が毎日のように耳に届く一方で、会話不足が引き起こす悲惨な事件も少なくない今、言葉も習慣も文化も年齢も壁にならない、紙を折るという、小さな作業から生み出される絆が、大切なものかもしれません。だから誰でも折れて、誰でも教えられようような身近な折り紙を、私は作りたいんです。



青柳さんが編纂したクリスマスのための折り紙の本（英語版）。世界に愛読者がいる